

戦時下の土浦中学生3 ～出征兵士の奉送迎～

1937(昭和12)年7月に日中戦争が勃発すると、召集を受けて出征する兵士が多くなりました。土浦中学生たちも、その都度、土浦駅や筑波線真鍋駅に向向いて奉送をしています。ところが、戦火の拡大とともに奉送した兵士たちの遺骨をも迎えることにもなりました。文中の【 】内は筆者による注記です。

出征兵士を送る

1年生の清水周宏(中43回)は、土浦駅での奉送の様子を『進修第42号(1939・昭和14年3月5日発刊)』に「出征軍人を送る」と題して記し、死地に赴く兵士たちの胸中を思い遣っています。

「近所の者と一緒には停車場【土浦駅】へ向つた。停車場には雄々しい出征軍人が四人程来て居られた。しばらくすると僕等は停車場前の廣場を集つた。そしていろいろの挨拶がすんで心から僕等は萬歳をとへた。兵士は唯下を向いて涙をぬぐつた。

ホームへ入ると軍歌が天にも轟けとばかりおこつた。兵士は唯下を向いて嬉しさに立つてゐた。列車到着【到着】時刻が次第にせまつて来た。僕等は姿勢を正して君が代を歌つた。その歌の中に汽車はしづしづと流れる様にホームに迂り込んだ。あたりは森閑として物音一つさへ聞えない。兵士は不動の姿勢を取る。そして其の眼にはあつい涙が光つてゐた。

あたりの静けさを破つて汽車の汽笛は高い高い大空に響きわたつた。

『では、立派に行つて参ります。』と元氣には言つたものの、最後の言葉は涙にうるんでゐた。其の兵士の胸の中察するに餘りある。(略)

また、3年赤根勤(中39回)は、東城寺の仁王門前で地元の出征兵士を送っています。

「(略)【日中戦争の勃発によつて】召集令は全國に飛んだ。我が山麓の寒郷山ノ莊村にも。

十七日午前まだ明けきらぬ夜を衝いて出征勇士及び村民は仁王門前に集合

した。仁王門、それは我等にとつて最も懐しい存在であつた。今までに我國運を賭した日清、日露兩役を始め滿洲事變に前上海事變に幾多の勇士を送り、赫々たる武功に輝く凱旋兵を迎へたのであつた。その仁王門が今又今次の事變【日中戦争】に出征する勇士を送るのだ。門頭に交錯された國旗が勇士の心を表す如く翻つてゐる。



東城寺仁王門。右上は仁王門に掲げる「東成寺」の扁額。創建当初の平安時代初頭から寺号は「東成寺」と表記されていましたが、江戸時代に土浦藩主土屋陳直(のぶなお)侯の庇護を受けるようになってからは、土屋侯の「土」を加えて、「東城寺」と表記されるようになりました。

征く者送る者、誰の胸も赤い熱烈なる愛國の念に沸き立つてゐる。村の諸有志の出征兵に送る激励の辭。出征兵士の答辭。

すべてが力強く頼もしい。花火と萬歳三唱。出發。いよいよ別れた。朝日が昇る。

(略) 『進修第41号(1938・昭和13年3月1日発刊)』「出征兵士を送る」

こうした情景が、日常生活の一コマになり、全国津々浦々で見られるようになりました。5年生山口宏三(中38回)は、通学列車の中で見かけた出征兵士の様子を次のように記し、国のために戦う覚悟を固め乍らも、一方では寂しさが募る

兵士の心に共感を寄せています。

「その朝の一番列車は通學生や通勤者で超満員であつた。體の自由は殆んどきかぬ。ふと見ると僕の肩と擦れ違ひに軍装の人が立つてゐる。あたりの雑踏も外に車窓越しに過ぎ去る山川を感慨深げに、じつと眺めてゐる。胸に貼られた布に依つて、その人が出征勇士だと云ふことを知つた。車内の雑音に交つてガタゴトガタゴト車輪の音が響く、唯彼のみ黙然としてゐる。彼は驛頭萬歳の聲に送られて、勇んで乗り込んだのだらう。併し唯一人になつて見ると無闇に故郷の事が懐ひ出されるのだらうか、彼の悲しげな眼は、未だじつと過ぎ去つた後を凝視してゐる。

汽車が次の驛の構内に滑り込んだ時、彼は急にきよときよとし始めた。知人でも居るのだらうか、全く停止して乗客が押し合ひへし合ひ、乗り込んだ時、彼の眼は急に陽氣に、懐しさに耐へられない様な輝きを見せて『やあ!』と大聲でドアの方へ呼び掛けた。あまり意外であつたので、皆ぎよつとして一齊に顔を向けた。相手は青年であつたが、亦『やあ!』と大きく應じて、進み寄つた。周囲は再び静まり返つて居る。何時の間に出たのか、ガタガタガタと云ふ車の音が耳に入る。二人は固く手を握り合つて居た。『おめでたう』『うん有難う、元氣で行つて来るよ。』(略) トーチカを一番乗りしない中は、死んでも歸つて来ないぞ。『さうだとも、俺も此の正月には兵隊さんだ。大いに頑張らうぜ。銃後は此んな大勢の中學生が居るから安心だ。』

此の會話を聞いて僕は嬉しさと、頼もしさと、重大なる責任とを感じた。日本は戦闘に於て必ず勝つ。而して吾等に依



戦場に赴く兵士たちを駅前通りで見送る女学生(左:『ふるさとの思い出 写真集・土浦』より)。同じく、土浦駅ホームで見送る市民(下:『むかしの写真・土浦』より)。



つて銃後戦線にも勝たねばならぬと、堅く堅く決心した。(略) 『進修第42号』(應召兵)

出征する兵士が増えてくると、当然のこと乍ら、生徒たちの友人・知人、肉親・親類も出征するようになり、更に、土浦中学でも出征する先生方が出てきました。1935(昭和10)年には配属将校の藤田正教官、1937年には武道科(剣道)の平塚美治先生など5名の先生方に召集令状が届きました。『進修第39号』及び『進修第41号』誌上には、藤田・平塚両先生に対する生徒たちの送別の辞が載せられています。

遺骨を迎える

日中戦争が始まった1937年以後、出征見送りと並んで戦死者の遺骨奉迎や町村葬への参列が多くなりました。土浦中学生による土浦・真鍋駅頭での送迎は、1937年だけでも21回、1938年には22回、葬儀への参列は1937年に11回、1938年になると20回に及んでいます。

1937年9月28日深夜、海軍二等水兵關勝の遺骨が土浦駅を通過し、校長他7名の先生と同級生とが迎ええました。關は、土浦中学を5年生の6月に中途退学し、横須賀海兵団に入団。教育訓練を受けた後に艦上勤務となり、警備の任務に出航中、日中戦争が勃発しました。關は陸戦隊を志願して、上海戦に参加。9月4日に戦傷を負い、9月10日に戦死しました。弱冠19歳。親友の遺骨を土浦駅で迎えた5年生高木邦次(中37回)は、「駅頭に立ちて、我が親友「關君」の靈を迎へて」(『進修第41号』)と題して、その悲しみと諦めきれない気持ちとを綴っています。

「(略) 列車がすべりこんだ。悲しい列車が……丁度友の遺骨は自分の前に停つた。白木の柩に變つた友の姿、遺族や海軍の方に守られて……自分は唯悄然として立ちすくみ、折からの讀經に一掬の熱涙【一掬の涙いぎの涙両手で掬うほどのたくさんの涙】を流さずには居られなかつた。胸がこみ上げて……そしてひたすら人生の悲哀を感じつゝ、讀經はなほ續く。

僕は心の中で叫んだ。懐しき友、關君よ。人生いつか死有り。その中に君は華々しく戦場の華と散り奉公殉國の榮を負つて遠く逝つたのだ。我等日本人として、男子として、それ程の名譽が又とあらうか。しかし車窓に見える君の姿を見るにつけて、君とすごした楽しい學生時代の事が思ひ出され、なぜに生きて元氣な姿を我々の前に見せて呉れなかつたのか? どうして君がきつ、いた時、運命の神は君の生命をして絶後によみがへらして呉れなかつたのか? 僕は悲しくて悲しくてならない。(略)

あ、我が友關君の靈よ、我れ今感極まつて言ふ所を知らず。ねがはくばこのわびしき我が心中を解せ。然して幸に瞑せよ。(略)

列車は靜かに去つた。そして二度と歸らない關君の靈を乗せて……

僕は唯々感激にむせび泣きつゝ、つめたい宵のペープメント【石を敷きつめた歩道】を無心で歩いた。」

1937年11月4日には、栗原武之輔(中38回、当時4年生)・章(中41回、当時1年生)兄弟の次兄正巳の戦死公報が届き、それぞれの担任と組長とが弔問に訪れています。その兄の遺骨を迎えた時のことを武之輔は、5年生の時に「兄の遺骨

出迎へ當時を思ひ起して」と題して、『進修第42号』に寄稿しています。

「土浦驛から乗車した僕は、列車が動き出すと直ぐ二等室に入つて行つた。父が白い布で覆はれた柩を、しつかりと抱いて居た。その前にやはり同村の者で、遺骨出迎へに行つた人が、向ひ合つて腰を掛けて居た。僕が入つて行くと、父はちらりと僕を見たきり、再び俯いてしまつた。僕は何となく嚴肅な感に打たれて、自然と頭が下つた。そして思はず目頭が熱くなつた。僕は兄の白木の柩をじつと見つめて居るのが、たまらなく悲しいやうな氣がして、居た、まらず、その室を出てしまつた。あの優しくして呉れた兄が、今は魂となつてあの柩の中に瞑つて居られるのだ。さう思ふと全く感慨無量だつた。間もなく荒川沖に着いた。在郷軍人、青訓【青年訓練所の人々】及び坊さん達が、驛内に出迎へて居て呉れた。想へば八月十四日同じ此の停車場で、村民の歡呼の聲に送られて出て征つたのだつた。昇降口に立つて打振る手が、何時迄も何時迄も消えなかつた。今でも臉の裏に焼附いてゐる。出征當日兄は蟲齒が腫れて居たので、母が大層心配して薬等入れてやつたのだつた。併し『此位大丈夫だ』と言つて元氣に出征したのでつたが、塘沽上陸以來連戦奮闘する事二箇月餘、遂に【10月12日】元氏【現中華人民共和國河北省石塚莊市元氏県】の華と散つたのだつた。出征する以上戦死は元より覺悟してゐたが、かくも早くそれが現實にならうとは思はなかつた。而もその明闇の世界が、あまりにも幽かである爲か、戦死の報を得ても今迄は信じられなかつた。併し今は遺骨を迎へたのだ。兄は確かに白木の柩に入つて歸つて來

たのだ。僕は行列の後について驛外へ出た。多數の村民及び各種團體が、寂として聲なく頭を垂れてゐられるのを見た時、全く感謝感激の外はなかつた。直ちに遺骨が安置された。そして讀經が始まつた。靜かに立上る線香の煙、鐘の音、讀經の聲、皆一人の哀愁を唆つた。だが君國の爲の犠牲者に對して、何で悲んでならう。泣いてならう。僕は心から祈つた。兄の英靈よ安らかであれと。」

1939(昭和14)年10月中旬には、英語科の田中俊吉先生の訃報【10月13日姫路陸軍病院で戦病死】も届きました。田中先生は1927(昭和2)年3月、東京帝大文学部を卒業、海軍技術研究所、水戸師範学校を経て、1934年8月に本校に赴任しました。先生は、英語の授業のみならず、テニス・柔道も熱心に指導していました。1937年11月召集を受け、郷里の姫路第三九聯隊に入隊しました。姫路の原隊において中隊長代理として兵の教育に当たつていましたが、翌年5月に中国大陸に渡り、歩兵中尉として活動中に戦傷を負い、姫路の陸軍病院で療養中でした。『進修第43号(1940・昭和15)年3月1日発刊』には「故田中俊吉先生を悼む」の特集が生まれ、英語科の小澤永次郎先生と生徒6名とが、詩文を献じ、先生を偲んでいます。

※アジア太平洋戦争が激しくなると、戦死者の柩には戦地の砂や石が収められたものが多くなつてきました。更に各地で玉碎が相次ぐと、柩さえ届かなくなりました。戦死者310万人のうち240万人が海外で死亡していますが、2011年時点で日本に帰還できた遺骨は127万柱に過ぎません。日本は、兵士の死に場所や死に方を遺族に教えられない国でした。

(加藤陽子「戦争まで」朝日出版社)
(高21回 松井泰寿)